

Anatolia の人名と Aegaeum の人名

岸 本 通 夫

1. 本稿の目的は、筆者の年来の主張の趣むきに従がい、印欧系の Hethitici 族 (略 Heth. 族) に先駆けて、三千年紀末頃東方より Caucasus 山脈越しに Anatolia 高原に入った同じく印欧系の Luvitici 族 (略 Luv. 族) は、その後 Heth. 族の後方からの圧迫に促がされて、東北より西南の方向に高原を横断し、やがて、Hellenes あるいは Achaioi の北方 Balcan からの登場に一步先立って、Aegaeum の諸島乃至 Hellas 本土に進出していたに相違ないとの見通しに立ち¹⁾、この仮説を裏付けるために、Cnosus・Pylos・Mycenae の各地から出土したいわゆる Mycenae 文書について、この文書に見出される少なからぬ数の人名の中から、ある程度の数²⁾に達する Luvitica 語 (略 Luv. 語) 風の人名を検出することができないか否かを試みるにある。

2. ところで、Luv. 族またはこれに近縁の Anatolia から進出した印欧系の民族が、Achaioi に先立って二千年紀の Aegaeum に活躍していたことを信じ、これを立証しようと試みているのは筆者ばかりではない。すなわち、L. R. Palmer と A. Heubeck³⁾とであるが、特に P. は、さらに一步を進めて、Linear A の文書そのものを Luv. 語またはこれに近い関係に立つ Anatolia 語派の方言に帰し、この観点から Lin. A の解説を試みて、すでに 1958 年 TPS 誌上に 'Luvian and Linear A' なる論考を発表しているという⁴⁾。この論文に接することはできなかったが、P. の見解の概要は、L. R. Palmer, *Mycenaeans and Minoans*, London 1961 によってうかがうことができる。筆者の立場からその概要を記すならば、i) MM I-III A 期の間に Creta 島において、この島特有の象形文字の創始と発達とがあったが、ii) MM III B 期に至って、小アジアより Luv. 族の侵入があり、Luv. 族は、先住民の創めた象形文字を簡略化して、Lin. A の体系を編み出し、これによってその言語を記した、とするにある⁵⁾。すなわち、a) 第一段階の象形文字は、最初の Cnosus 王宮を建てた島の先

住民に帰するが、b) これを変容してつくった Lin. A 文字は、新たに同島に到来した Luv. 族の言語を記したものと見るのが、Palmer 説の骨子であるように理解される。P. の試みは、言語に関する事実と、考古学の教える事実との双方を見くらべながら、両者の総合を試みつつ Aegaeum 二千年紀の歴史を一つの像に描き出そうとする所にその特色が存するようであるが、考古学を詳しくしない筆者としては、もっぱら P. のかかげる言語面の事実を検討の筆をかざることにしたい。

3. 以上のような Palmer の見解に対して、正面から批判者として立つのが、Fr. Schachermeyr である。Kadmos 誌創刊号に寄せられた '*Luwier auf Kreta?*' (Berlin 1962, p. 27 et seq.) におけるその批判の要は——ここでも考古学上の問題はしばらくおいて、言語の事実主題をかざれば——たとえ Lin. B の文書に登場する固有名詞の間に、Luv. 語と共通の言語要素——語根・接尾辞など——が発見されとしても、一般に Luviticum という概念そのものがはなはだ曖昧であり、かつまた、たしかに Luv. 語そのものに属すると認められる要素のうちにも、印欧系の言語に先立ってこの方面に根拠をもった地中海言語 *das Ägäisch* から借用せられたものが少なからず含まれている筈なので、それらの Myc. 語と Luv. 語とに共通の成分も、実はこの *Ägäisch* のものが共通に借用せられたに過ぎない可能性のあることを説いて、Palmer の主張も、さらに論旨を徹底して、P. の挙げる Myc. 語と Luv. 語との相似点・共通点、たしかに印欧基語に源をさか上ることを立証するのではなければ、決定的な裏付けを得たというには足りないことを指摘するにあるようである。

以上のような Sch. の批評は、個々の細目については、異議を挟むべき点が少なくないが、言語の側から Aegaeum および Anatolia の二千年紀を問題にするに当たっては、Luv. 族や Achaia 族の登場以前の先住民の、侵略者の言語に対しては基層 *substratum* をなした地中海言語の顧慮さるべきことを警告している意味で注目すべきであろう。ほとんど対照的というべきは、Palmer が、上に引いたその著において、Lin. A に先行した象形文字の表わしている筈の言語について、一言半句の触れる所もない事実である。

4. その種類とか文法構造の概貌などについては、具体的なことのほとんど知られていない⁶⁾ 地中海言語または *Ägäisch* の概念も、民族概念または文化概念としての *luviticum* の称⁷⁾ におとらず曖昧なものではあるが、一つまたはいくつかの言語が、

Myc. 語や Luv. 語の印欧系言語に先立って、Aegaeum の世界にあったことは疑いがなく、この言語基層は、確かにその露頭の一端を Myc. 語そのものの中にもものぞかせている。具体的な一例を通して、この基層をなした言語の存在に迫ることを試みよう。

M. Ventris が 79 の番号を付した文字 $\text{-}\text{𐀀}\text{-}$ は、その音価についてなお断案の得られていない文字の一であるが、多くの人の見る所に従ってこれを *zu* と読むことにすれば、Pylos 文書の一つに我々は、*teojo doera* ‘神の婢’の一人として *Mazu* の名を見出だすが⁸⁾ (En 74. 8, Eo 276.7), この名は、Lycia 碑文の人名 *Mizu* (TL 32. c, s) を想起せしめる⁹⁾。おって記すように、Lin. B 文書の人名の中には、Lyc. 語碑文に見える人名に通ずるものが若干は認められるので、*myc. Mazu* : *lyc. Mizu* の一組の相似た名も、この種の一として採り上げるには値するかと思われる。

しかしながら、*myc. Mazu* の人名は、*lyc. Mizu* との類似を離れても、一つの問題を提起する。すなわち、この人名は、含むところわずかに 2 音節にすぎないという事実である。

周知のように、印欧語の人名には、その諸方言に広く流布して見出だされる一つの基本型があり、 $\text{Ἀριστο-τέλης, Καλλί-μαχος}$, skr. *Deva-datta, Viṣṇu-śarman*, ap. *Haṣā-maniš*, gall. *Dumno-rix*, ags. *Sige-mund*, ahd. *Sigi-frith*, russ. *Svjatoslav* のように、二の語幹よりなる合成名詞であることを特色とし、従って共通基語の原形としては、一般に 4 音節以上の長さであることを原則とする。無論一方には、hypocoristicum または Lallnamen と称せられて、多くは上掲の型の名を短縮した 2 音節程度の名もない訳ではないが、今これを問題の *Mazu* について考えた場合、この名を印欧語系の何かの Lallnamen と解釈できる可能性もまずありそうには思えない。そこでこの名を、仮に上述のように *lyc. Mizu* と同じ語源をもつものとして、Lyc. 語と密接に関連するとせられる Luv. 語に同じ名があったものと想定してみても、この名を印欧語の人名として解釈を施す道はないとすべきであろう。

注目せられるのは、この類の 2 音節の人名が、Lin. B の文書から少なからず摘出せられることである、例えば：

Azu (KN Ap 633.2, MY Oe 123), *Idu* (KN Ap 639.7), *Jaru* (KN C 911.4), *Kero* (KN U 746, PY Jn 413.7), *Kuso* (PY Eb 893.1, Ep 301.10, MY Oe 103.6), *Maku* (KN Ap 639.3), *Naru* (KN Db 1304), *Roru* (KN C 50.2, r. 2, Db 1185, De 1234), *Seno* (PY Cn 131.11, Es 644.3, etc.), *Sima* (PY En 609.8, Eo 211.5),

*Uro*₂ (KN Db 5367) のように、この種 2 音節の人名を、Knosus, Pylos, Mycenae をあわせて、およそ 100 近く挙げるのできるのである。上掲のうち、*Azu*, *Idu*, *Maku* は、*Mazu* とともに、女子の名であり、-u に終る女子の名という点も、印欧語の人名としては説明が困難であろう。さらに興味深いことには、上掲のうちの *Maku* と *Naru* とをほとんどそのままに、^{SAL}*Māku*, ^{SAL}*Nāru* の二つの名が、いずれも決定詞 *determinativum* によって女子の名であることを明示されて、Boğazköy 文書から見出だされる¹⁰⁾。かように顕著な一致が認められる以上は、*Uro*₂ の名も、luv. *ura-*, heth. *ura-*, hh¹¹⁾. *ura-* ‘大きい’ の形容詞そのものが人名に用いられたものと解してよいかも知れない。さらに *Jaru* は、*Data-jaro* (KN Dv 1153), *Moni-jaro* (KN X 1498) の二の人名の後半の成分をなすものに他ならず、heth. *Mulli-jara* (Rec. no. 434), *Kasi-jara* (no. 276) も同じ要素を含むものと見てよいかも知れない。

しかしながら、すべてこれらの、myc., heth., luv., hh., lyc. に散見する 2 音節の人名または人名要素が、相似する一組ごとにそれぞれに同じ語源に出ているとしても、これらが印欧基語にさか上る語幹であると考え難いことは、はじめに *Mazu* について考察した通りである。今もし Palmer に従って、Lin. A の文字体系を仮に Luv. 語に帰するとしても、これらの人名は、決して Luv. 族が印欧語民族の故地から小アジアを経てこの島にもたらしたのではなく、myc. 語のための Lin. B と Luv. 語のための Lin. A との二の文字体系の基をなした所の Creta 島象形文字そのものの表わしている言語、すなわち最初の王宮を建築した島の先住民の言語から、Luv. 語と Myc. 語とに借用せられた人名と見るべきものであろう¹²⁾。

試みに Laroche の Recueil¹⁰⁾ を繙いて、ここに収められた千余の人名を観察するならば、そこには、Heth. 語固有の人名——*Arnuwanda* (Rec. no. 88), etc.——とともに、Luv. 語風の名——*Piyamaradu* (no. 539), etc.——が見られるのは当然として、なおこのほか、Hatti 語風の *Neriqqaili* (no. 478), etc., Hurri 語の *Kikkulli* (no. 293), etc., Mitanni の Skr. 語風の *Tusratta* (no. 737), etc., Sem. 語風の *Bentesina* (no. 554), etc. 等々、加うるに Egypt 風の *Reamassi* (no. 594) の類の名さえ見出だされる。Europa から Orient に向って開かれた東方文明受容の門戸ともいうべき二千年紀の Aegaeum において、Lin. B の文書に登場するおびただしい人名についても、情況は、Boğazköy 文書の場合とまさに同様のものがあつた筈である。ただ相異なる点は、Heth. 語の周辺をなした諸言語について知られている僅かなこ

とほども、我々は Myc. 語の周辺をなした諸言語に関しては知る所がないというだけである。しかしながら、少なくとも Anatolia から Aegaeum にかけての二千年紀には、まず、a) Heth. 語, b) Luv. 語, c) Hh. 語, d) Palaitica 語, e) Lyc. 語の原型¹³⁾, f) Lydica 語の原型の、以上六の印欧語族の Anatolia 語派として一括せられる方言のほか、i) Hatti 語, ii) Hurri 語, iii) Caria 語の原型があり、さらに、iv) Creta 象形文字を創り出した同島先住民の言語——これを Cretica(略 Cret. 語)と名付けよう——があった筈である。しかも決してこれでこの方面の言語の種類をつくした訳ではない。v) Etrusca 語との類似を云々される Lemnos 島の碑文の言語があり、vi) Phaestus の円盤の音節文字らしい一種の象形文字の背後に秘められている言語があり、また伝承の教える所に従って我々は、逆に、例えば Leleges なる先住民の用いた言語は、いかようであったかを問題にすることもできる。

要するに我々は、Lin. B 文書に登場する人名を、一つ残らず Gr. 語に還元しようと試みる要はない所か、むしろ Gr. 語としては説明しきれない要素の少なくないことを、基本的な前提の一として、問題にのぞまねばならない筈なのである。

5. さて、おそらくは Egypt 象形文字に示唆をえて¹⁴⁾、独特の文字を編み出した Creta 島先住民の Cret. 語とは、いかなる言語であったろうか。Lin. A の言語は、丁度 Hieratica や Demotica が、単に Egypt 象形文字を簡略にしたものに過ぎず、本質的には象形文字の言語そのものを別の文字体系で表わしているに他ならないように、略化された文字で表現された Cret. 語に過ぎないか、それとも、Palmer の唱えるように、Luv. 語またはその一方言であるか、筆者もこの問題には、にわかに賛否の態度を決し難いが、現在のところ、象形文字についてよりは遙かに多くのことが知られている Lin. A の表わしている言語に関して、筆者自身の有している乏しい知識を要約してみるならば：

i) Lin. A の文字のうちには、すでに解説せられた Lin. B の文字と共通のものが相当数あり、しかもこれらに関するかぎりは、Lin. B の場合と同じ音価を与えてよいと見られている¹⁵⁾。

ii) 印欧語らしい特徴と見える諸点を挙げれば：

a) i.-eur. **-k^we* (> skr. *-ca*, lat. *-que*, gr. *-re*, myc. *-qe*) および, heth. *-a*, luv. *-ha*, hh. *-ha*, lyc. *-ce*, lyd. *-k* と同様に用いられるらしい encliticum *-qe* が存在するようである¹⁶⁾。

β) luv. *-mi*, lyc. *-mi* に相当するらしい受動分詞の接尾辞 *-mi* が存在するかに見える¹⁶⁾。

γ) 動詞の 3. sg. に *-ti* の語尾が用いられるらしい¹⁷⁾。

iii) *-u* に終る語形がしきりに見出だされることが注意されている¹⁸⁾。文書の内容は、Lin. B の場合と同様、物品目録がほとんどのようであるから、記されている語形も名詞(形容詞)を主とするであろう。かくして、名詞に *-u* 語幹のものが多いとすれば、これは、luv. 語の語幹形成母音 *vocalis thematica* が *o* であるのとは著しい対照をなす。しかしまた、印欧語の語幹形成母音 **-o-* (>skr. *aśv-a-*, gr. *ἄνθρωπ-ο-*, lat. *domin-o-*) が、heth. *-a-*, Lin. A *-u-* として現われているものかも知れない。

iv) Gr. 語も、Heth. 語・Luv. 語も、語頭に *r-* 音の立つことがないのに、Lin. A には——および Lin. B も——語頭に *r-* を有する語が見出だされる。ただし Lin. A, B とも、文字体系として *r* と *l* との区別がないが、仮に *ra*, *ro*, etc. として転写されている文字が、事実 *r* の音を表わしていたとすれば、Lin. A に見られるこれらの語頭 *r-* 音の語は、Cret. 語からの借用と解するのでなければ、Lin. A すなわち Luv. 語とは認め難い。

Lin. A の言語について知られている所も乏しいが、Lin. A の前段階をなす象形文字の言語について知られている所は——仮に Palmer の説のごとく、Lin. A と象形文字とが全く系統を異にする別の言語を表わしているものとして——なおのこと僅少である。我々はこの言語——Cret. 語については、わずかに、Lin. A, B なる両種の文字の在り方を通して、これらの文字体系の母胎となった象形文字の言語の、二三の音韻上の特徴を臆測しうるにすぎないのである、すなわち：

i) Lin. A, B の文字が、特殊の二三を除きほとんどすべて CV の組合せよりなる音節文字であることから、その原型をなした象形文字の言語もまた、丁度我々の日本語のように、一の子音はかならず一母音を伴ない、従って閉音節を有せず、重子音の全く現われることのない音韻構造の言語であった。

ii) 流音に *r:l* の二種別のない点でも、日本語と一つの特徴を共通にする言語であった。

iii) しかしながらその流音が語頭に立つことがありうる点では、日本語とは異質的な言語であった。Lin. A, B に見られる語頭 *r-* 音の語は、すなわちこの Cret. 語からの借用に負うものであろう。

iv) 破裂音の体系は、奇妙な構造を示し、歯音のみ有声 d: 無声 t の別があるが、唇音・喉音は唯一種ずつの音素を有するのみであったであろう。一方喉音には、硬口蓋音 k: 軟口蓋音 q の二種があったであろう。

6. 以下は、Schachermeyr の指摘する所に鑑がみて、Lin. B の文書に現われる人名には、地中海言語または Ägäisch——というよりも一層具体的には、Knosus の最初の宮殿を築き、独自の象形文字を創った Creta 島先住民の Cret. 語から借りられたものも少なからざるべきことを充分考慮に容れつつ、これらの人名の間から、Luv. 族や Lycia の人名と共通する要素を検出することを試みよう。

まず、すでに指摘されているものを挙げて、再検討を試みる：

i) *Moqoso* (KN x 1497), gen. *Moqoso-jo* (PY Sa 774) : heth. *Muksu* (Madduwattas 文書, i. e. KUB XIV 1 II 75, Rec. no. 432), hh. *Muksas* (Karatepe LVII 327), lyc. *Mukssa* (TL 44. d. 39), gr. *Μόψος*. さらに Lin. A の文書にも *mokusu* の綴が見出だされる²⁰⁾。この名も印欧語風には見えない。もとは cret. *Mokusu* の人名があり、これが、一方では, myc. *Moqoso* (= *Mok^usos*), gr. *Μόψος* と伝承せられ、他方では, luv., heth. *Muksa*, etc. の形を取ったのではないか²¹⁾。

ii) *Pija-siro* (KN As 1516.3), *Pija-semo* (KN As 1516.9), *Pija-maso* (PY Fn 324.11), *Pija-munu* (KN L5901.1) に含まれる *Pija-* は, heth., luv. *piya-*, hh. *pia-*, lyc. *pije-* なる動詞語根‘与える’に当るものに他ならないであろう²²⁾。しかも第一の名 *Pijasiro* に正に対応する *Piyassili* (Rec. no. 542) があり、第三の名には、Luv. 語の形として **Piya(m)massi* を推定することができる (cf. *Piyama-radu*-Rec. no. 539)²³⁾。Schachermeyr は, myc. *pija-* : heth.-luv. *piya-* の一致は、偶然の仕業でないならば、両者がそれぞれに地中海言語 Kleinasiatisch-ägäisch から借用したものと主張するが²⁴⁾、heth. *pai-*, *piya-* ‘与える’の語根は、印欧語の多くの方言には対応形を認め難いにもかかわらず、その動詞としての屈折の相に古風なもののあることなどから考えて、共通基語の極めて古い層から Anatolia の諸方言に継承せられ保存せられた語彙の一とする見解が有力である²⁵⁾。従って、これら一連の人名は、Luv. 族が Anatolia から Aegaeum へもたらした Luv. 人の人名と見るべきであろう。なお, myc. *Pijasir-o-* : luv. *Piyassil-i-* の対照から Luv. 語の語幹形成母音 *-i-* は, Myc. 語に移されて *-o-* と Gr. 語化されることがあると推定することがで

きょう。

つぎに、筆者自身の認めた若干の相応を挙げると：

iii) 既述の myc. *Mazu* : lyc. *Mizu* (Μέζος), myc. *Naru* : heth. *Nāru*, myc. *Maku* : heth. *Māku* をまずここに再録しておく。

iv) *Karai* (PY Es 650.8, 726.1) と lyc. *Kerēi* (TL 44. a. 47, 48 ; 176) との類似も注意に値しよう。Lejeune は、この形を dat. pl. と説明するが²⁶⁾、例えば Es 650 では、*Karai* は、他の人名 *Kopereu* (Κοπρέυς), *Arekuturuwo* (Ἄλεκτρούων), *Aikiwaro*, *Kudamaro*, *Pirotekoto* (Φιλοτέκτων) などの nom. sg. と相並んで、同じように 3. sg. の動詞形 *eke* (ἔχει) の主語に立っているのであるから、*Karai* もまた他と同様に人名の nom. と見るのがもっとも自然なうけ取り方であって、Lejeune のような解釈は、Lin. B 文書のすべてを Gr. 語として説かねばやまない一種の固定観念から生じた附会の説とするほかあるまい。Lin. B 文書には、このほか *Matai* (PY An172.9) の nom. があり、Lyc. 語碑文からは、*Kerēi* と同型の nom. として、*Pttlezēi* (TL 10), *Tewinezēi* (TL 3.2), *Kuñnijēi* (TL 118.1) を挙げることができる。*Matai* の語形も Lejeune は、*Matai*<*jo*> (Ματαίως) を書記が書きもらしたか、あるいは *Matare* (Μαντάρης) を刊行者が読み誤ったかの何れかと解しようとするが²⁷⁾、これまたすべては Gr. 語で理解されねばならないという偏った立場そのものに無理が内在しているのであって、Lin. B 文書の人名には、Gr. 語の粹だけでは説明しきれない要素のあるべきことを前提とし、*Karai*, *Matai* のような Gr. 語としては奇異な nom. の存在もあるがままの姿でこれを認めて、むしろその源を Cret. 語の方向に探るべきであろう。なお Boğazköy 文書からも、*Panai* (Rec. no. 507), ^{SAL}*Titai* (no. 719) の、*-ai-* 語幹の二の人名が見出だされることを付言しておく。

v) *Doqoso* (MY Au 609) と lyc. *Ddaqasa* (TL 88.1, 2) の類似も注意を呼ぶ。Myc. 語——というよりも Gr. 語一般に母音間の **-σ-* が消失し、Lyc. 語でも母音間の **-s-* は、*-h-* に弱まること認められている²⁸⁾のであるから、*Doqo-s-o* : *Ddaqas-a* の *-s-* の起源も問われねばなるまい。印欧語風には見えないこの名も、Cret. 語から Myc. 語と Lyc. 語とにそれぞれ入り込んだ異民族の人名であろう。なお *Doqoso* と共に、*Doqono* (PY Cn 131.12), *Doqoro* (PY An 654.13) の名もあることにも注意する要があろう²⁹⁾。

vi) *Samutajo* (KN L 520.3, PY Jn 389.4, Vn 865.3) および *Simuta* (PY Jn 832.2) の名に対して、lyc. *Semuteh* (gen. TL 86.2), *Semutah* (gen. TL 148) および

Temu-semutah (gen. TL 70.3) の名が見出だされる。この名もまた印欧語にさか上るようには見えない。

vii) *Sarapeda* (PY Un 718.1), *Sarapedo* (PY Er 880.2) の人名(または地名)があり, Ilias では, Lycia 軍の将として Troia 側を支援した *Σαρπηδών* の名との類似が注意されているが³⁰⁾, なお Lycia の碑文にも, この名に当るかに見える *Zrppedu* (TL 44 d 6), *Zrppudeine* (dat. 44.b.46) の形が見出だされる。語頭に立ち, 母音を従える *s- 音も, 本来の Gr. 語ならば粗気音 *spiritus asper* に転じておる筈であるから, 語頭の s- 音をとどめる *Sarapeda*: *Σαρπηδών* の名も, その起源は当然 Gr. 語の外に求められねばなるまい。これも Cret. 語に起源をもち, 元来は, *Sarapedo-* のごとき形であったものが, *Mokusu* > *Mok^{wo}so-* (myc. *Moqoso*) > *Μόψο-* の場合と同様に, 第 2 音節の母音を失って, *Sarapedo-* > *Σαρπηδ^o-* の転訛を経たことも考えられよう。

viii) *Dawi* (KN Db 1212) の人名があり, これに対して, Lycia 碑文の人名 *Ddawā-partah* (gen. TL 101.1), *Ddawa-hāmah* (gen. 113.2) から人名要素 *Ddawa-* を抽出することができる。さらに Luv. 語は *dawi-* ‘眼’の語を提供する。luv. *dawi-* も印欧語にさか上る語彙には属するまい³¹⁾。‘眼’のような人名は, 印欧語としては奇怪であろうが, 民族によっては, ありえない名でもない³²⁾。cret. **dawi* ‘眼’が普通名詞として Luv. 語に借用せられ, 人名として Knosus 文書に現われ, 人名要素として Lyc. 語碑文に跡をとどめているということは, 少なくとも一の可能性としては, 全くありえないことではあるまい。

ix) *Puri* (KN B 799, V 479.2) の人名があり, 一方, lyc. *Purihi-meteh*, etc. (gen. TL 6.1-2, 25.3, 99.1—*Πυρτ-μάτιος*, -*βάρους*), *Purihi-mrbeseh* (gen. 62.2), *Purihi-meiga* (78.3) から Lyc. 語の人名要素として *Purihi-* (*Πυρτ-*) を採り出すことができる。そこで, *Pu₂rijako* (PY Jn 310.17) のような名も, gr. *Πυρτάρχος* のごとき形を宛てることもできようが³³⁾, むしろ事実上, cret. *puri-* から派生した, あるいはこれを第一成分として合成せられた所の, Myc. 語としては外来の人名でないともかぎらない。

x) *Muko* (PY An 172.5) の人名がある。これは, *Μυκ-άλη*, *Μυκ-αλησοός*, *Μυκ-ῆλαι*, *Μύκ-ονος* などの地名と同じ語根 *μυκ-*³⁴⁾: *muk-* を含んでいる可能性があろう。無論これもまた印欧語の語根ではなく, Cret. 語または他の地中海言語に属するものであろう³⁵⁾。

xi) すでに人名 *Uro₂* と *luv. ura-* ‘大きい’ との類似を指摘したが³⁶⁾, このほか, *Ura-jo* (KN Db1265, 1329, etc.), *Ura-mono* (KN As 1516.6) の人名および *Ura 86* (PY Na466) の地名がある。 *luv. ura-* ‘大きい’ が印欧語風でないことも既述の通りである。

xii) *Kodoro* (PY Jn 706.17) の名があるが, この綴に含まれる *-r-* 音は, Lyc. 語の *-l-* に当たるか, *-r-* に当たるか, すなわちこの人名は, *lyc. Kudali* (TL 1.2), *Cudalah* (gen. 43.1), *Kudalijē* (54.1, 72), *Kudalijehk* の一群に対比せしめるがよいか, それとも *Kudara* (143.1—*Κοδαρας*), *Kudrehila* (73, 132.1) の群に対比せしめるがよいか。無論 *myc. Kodoro* は, 直ちに Athenae の王 *Κόδρος* (Herodotus I 147, etc.) および Miletus 建設者の父 *Κόδρος* (id. IX 97) の名を想起せしめるが, この名そのものが, Gr. 語としては, *Ἰπποκράτης*, *Μεγα-σθένης*, etc. のようには語源的に透明でない。ここでもまた我々は, *cret. Kodoro*こそ, この名の原型であり, *Sarapedo-*, *Mokusu* の場合のように第2母音が落ちて, *cret. Kodoro* から *gr. Κόδρος* の人名が成立したと考えるのがもっとも正しいこともありえよう。

xiii) *Waparo-jo* (gen. PY An 656.1) を Palmer とともに *Φαρπάλοιο* と読むならば³⁷⁾, Andaval の Hh. 語碑文などに見える王の名 *Warpala-wa*³⁸⁾ との類似が注意される。P. 自身, hh. *Warpalawa* を念頭において, Pylos 文書のこの名に上の訓を与えたものに違いない。

xiv) *myc. Pijasir-o* が *luv. Piyassil-i* に当たるならば³⁹⁾, *Wasiro* (KN V 159.4) を *Wasili* (Rec. no. 813) または *Warsili* (no. 819) に, *Tataro* (PY Eo 224.7, Ep 301.6) を *Tatili* (no. 695) に対応せしめることができよう。 *Tataro*: *Tatili* は, *luv. tati* ‘父’ (hh. *tati*, *lyc. tedi*) の派生語である可能性があろう。

xv) *Amejato* (gen. PY Sa 834, Sh 736) の名は, *heth. ammiyant-* ‘小さい’ の *adj.* を想起せしめる。すなわち, *lat. Paulus* の名, *nhd. Klein* の姓に類する **Ameja* (nom.) なる人名が考えられる。これは, むしろ印欧語の型に属する語形とすべきであろう⁴⁰⁾。

xvi) *Sija-pu₂ro* (KN As 1516.11) の人名, *Sija-duwe* (loc. KN D1 930, 933, etc.) の地名および *Sija-ma* (KN V 1526), *Sija-mato* (KN Fp 48.1, X 451.1) に含まれる *sija-* は, 筆者が Caria の東辺を南に流れて地中海に注ぐ *Calbis Flumen* に比定した *Siyanti* 河⁴¹⁾ の名の語根そのものに当たる可能性があろう。ii) の *piya-* と同型で, *-nt-* の *suffixum* を伴うことがあり, なお *suff. -ma* をとることもあるら

しいとすれば、この語根は、Luv. 語に属すると考うべきであろう⁴²⁾。

xvii) Lin. B 文書の人名には、*Koru-daro-jo* (gen. PY Ae 26), *Kuka-daro* (KN Uf 836), *Pa₂si-daro* (KN Db 1110, Dx 1490), *Pu₂ru-daro* (KN Uf 432.3), *Tiri-daro* (PY Ea 28, 460, 754) 以下、後半部に *-daro* なる要素を含む合成語らしい型の名が少なくない。一方、小アジアにも、Caria の Πιξί-δαρος (Herodotus V 118—lyc. *Pike-der* TL 45.1), Ἀμισώ-δαρος (II 328), Lycia の Πάν-δαρος (B 827, etc.) の名が見出される。さらに、Lin. A 文書にも *-daro* に終る語形がいくつかあるというから⁴³⁾、この要素も、i.-eur. **dō-ro-*(>gr. δῶ-ρο-ν) などに語源を求めるよりも、Cret. 語に起源を持つ人名要素と見るべきではないかと考えられる。

7. 進んで、*-uro* (: gr. -υρα, heth. -ura), *-so* (: gr. -σοος, luv. -ssi-), *-to* (: gr. -υθος, luv. -nti-), *-uwa* (: gr. -ύη, heth. -uwa), *-ti* (: lyc. -ti, heth. -ti) などの suffixa を伴う人名・地名を通じて、これらの suffixa について考えてみたいが、ほぼ与えられた紙面を費やしてしまったので、これらについては次の機会をまつことにする。ただ、少なくとも luv. -ss- (>gr. -σσ-) と luv. -nt- (>gr. -νθ-) と heth. -uwa (>gr. -ύη) とに関するかぎり、これらは、印欧基語から Luv. 語に継承せられた suffixa であって、地中海言語の substratum が Aegaeum の地名などに残した痕跡ではないと判断せられることを繰返して強調しておきたい⁴⁴⁾。すなわち、α) luv. -ss- < i.-eur. **-sk-* であって、**-sk-* はすなわち、所有形容詞をつくる suff. であつたと考えることができ⁴⁵⁾、β) luv. -nt-, heth. -nt- は、元来は印欧基語においてもっとも広い意味で集合的の意味・機能を帯びた suff. であつたと解され⁴⁶⁾、γ) *-uwa* は、*-u-* 語幹の adj. の nom. -acc. pl. ntr. が名詞として用いられたものと説明することができる⁴⁷⁾からである。

8. ここに一言を加えて、上に挙げた Lyc. 語碑文の人名と Lin. B 文書の人名との対応から、Lyc. 語に関する一の音則らしきものを描き出しうることを指摘しておく、すなわち：

- iv) の lyc. *Kerēi* : myc. *Karai*
 vi) の lyc. **Semuta* : myc. *Samuta-jo*
 xvii) の lyc. (*Pike*)-*der* : myc. (*Tiri*)-*daro*, cf. gr. (Πιξί)-*δαρος*⁴⁸⁾
 以上に加えて、

Anatolia の人名と Aegaeum の人名

ii) の lyc. *pije-*, luv. *piya-* : myc. *Pija-*

xiv) の lyc. *tedi-*, luv. *tati-*, *Tatili* : myc. *Tataro*

を参照することができよう。

かくして, lyc. *e* : myc. *a* の音則を導き出すことができるが, これに対して luv. *a*, gr. α であることを見れば, *a* 音が Lyc. 語において *e* 音へ転じたと解してよからう。

ここに併せて Lyc. 語の成立に関する私見を要約しておくならば, Luv. 語またはその一方言を用いる所の, Luv. 族またはその支族が, Anatolia より発して Aegaeum に進出したのち, 特に Creta 島において, Cnosus の王宮を築き, 独自の象形文字を創めて, 高度の青銅器文明を誇るこの島の先住民から多くの影響を受け, その言語にも Cret. 語からの借用語を大いに交えるに至った。この Creta 島において著るしい変容を被った Luv. 語の方言こそ, すなわちのちの Lyc. 語の原型をなしたものであって, これら Creta 島の Luv. 族は, Herodotus (I 172, VII 93) の伝承のごとく, かの '海の民 *Seevölker*' の動乱に際して, Luv. 族の故地のうちでも, 特に天険にまもられて外敵の侵攻を防ぐにもっとも適した Lycia の地をえらんでこの方面へ復帰し, かような経過を経てここに Lycia の民族と言語とが成立するに至ったものと考え⁴⁰⁾。

9. 最後に, 6. i - xvii) に挙げた所の, Lin. B 文書と, Lycia の碑文乃至 Boğazköy 文書との間で, 対応の可能性があるかと思われる人名そのものまた人名要素 17 項目につき, これを整理して, Cret. 語起源の可能性の強いものと, Luv. 語——ひいては印欧語——にさか上る可能性の多いものとの二類に分ち, この両者がどのような分布を示しているか, いずれの方が, どの程度に多いかを概観しておこう。

α) Cret. 語起源らしいものは :

i) myc. *Moqoso*, gr. Μόψος : heth. *Muksu*, etc., iii) myc. *Mazu* : lyc. *Mizu*, myc. *Naru* : heth. *Nāru*, myc. *Maku* : heth. *Māku*, iv) myc. *Karai* : lyc. *Kerēi*, v) myc. *Doqoso* : lyc. *Ddaqasa*, vi) myc. *Samutajo* : lyc. **Semuta*, vii) myc. *Sarapeda*, gr. Σαρπηδών : lyc. *Zrppedu*, viii) myc. *Dawi* : luv. *dawi*, lyc. *Ddawa-*, ix) myc. *Puri* : lyc. *Purihi-*, x) myc. *Muko*, gr. Μυκ- , xi) myc. *Uro*₂, *Ura-* : luv. *ura-*, xii) myc. *Kodoro*, gr. Κόδρος , xvii) myc. *-daro*, gr. -δαρος : lyc. *-der*

β) Luv. 語起源らしいものは :

ii) myc. *Pija-* : luv. *piya-*, xiii) myc. **Waparo* : hh. *Warpalawa*, xiv) myc. *Wasiro* : luv. *Wasili*, myc. *Tataro* : luv. *Tatili*, xv) myc. **Ameja* : heth. *ammiyant-*, xvi) myc. *Sija-* : luv. *siya-*

以上を概観して、類似の認められる人名乃至人名要素のうちでは、むしろ Cret. 語起源と見えるものが圧倒的に多いことを知る。これはすなわち、Cnosus の最初の宮殿を築いた島の先住民の方が、Anatolia から渡来した Luv. 族に比べて、その文明の度において立ち優っていたという事実が背景にあり、その事実を反映しているのであろうか。

10. ともあれ、Aegaeum の人名と Anatolia の人名との間に、何らかの類似を示すものを搜索して、上記の17項を求めることができたが、この数は決して多いものというには足りない。Luv. 語の人名にしきりに見られる所の、*Tarhunt-*, *Datta-*, *Arma-* などの神名を含む人名⁵⁰⁾、あるいは、*-muwa* ‘精気・元氣’、*-ziti* ‘人’ に終る所の、Anatolia にはごく普及して見出だされる人名に相応するものが、Lin. B の文書からは全く検出されないことが異とされるのみならず、Boğazköy 文書の人名が概して物々しく厳めしく、総体に4～5音節の長いものが多いに反して、Myc. 語文書の人名はどちらかといえば3～4音節の軽快なものが支配的で、人名の構造そのものにも何か異質的なものがあるように感ぜられる。しかしながらまた、Boğ. 文書から得られる人名は、一般にどうしても Hatti 国の人名が大半を占め、ここに問題のもっとも焦点をなすべき Arzawa 国の Luv. 族の人名については——否、ただに人名のみならず、Luv. 語そのものに関して、我々の知識は、最近の Luv. 語研究の進捗にもかかわらず、これを Heth. 語について知られている所に比較するときは、なおなお零細で僅少であることを考慮せねばなるまい。さらに Lin. B 文書に現われる人名に少なからぬものを供与したに相違ない Lin. A の言語についての我々の知識が今なおほとんど白紙に近いという情況も、Lin. B 文書の人名の解析を進める上に大きな障害である。Lin. A の言語の研究が推進せられて、ついにその解読の成る日が待たれてやまない所以である。

(1963年8月10日記)

(筆者は大阪市立大学助教授)

註

- 1) cf. 岸本通夫、ヒッタイト史の諸問題(世界の歴史・第2巻、筑摩書房1960) p. 147 以下; 西洋古典学研究 IX, 東京1961, p. 6; 同上, XI, 1963, pp. 60—67; 西南アジア研究 No. 9,

Anatolia の人名と Aegaeum の人名

京都 1962, pp. 26—27.

- 2) 後にも触れるが, i) myc. *Moqoso*=gr. *Móψος*=heth. *Muksu*=hh. *Muksas*=lyc. *Mukssa*, cf. 岸本, 西洋古典学研究 XI, p. 66; ii) luv. *piya-* ‘与える’ の語根を含む myc. *Pija-siro*, *Pija-maso*, etc. の名など, 二三の一致は, すでに指摘されている。
- 3) cf. A. Heubeck, IF LXVII (1962), p. 201.
- 4) cf. L. R. Palmer apud Fr. Schachermeyr, *Kadmos*, I/1 (1962), p. 27.
- 5) cf. Palmer, op. cit., pp. 240, 256.
- 6) *Αίρνα* や *Αέλεγες* の語頭の *Λ(e)-* が, Hattica 語の Pl. の接頭辞 *le-* と同じ起源を持ち, 従って同様に Pl. を表わす形態素 morpheme であろうなどと, 確証のない臆測が唱えられているばかりである: v., e. gr., H. Kronasser, *W. Krause Festschrift*, Heidelberg 1960, pp. 52—53.
- 7) Schachermeyr, op. cit., p. 31 et seq.
- 8) Lin. B の綴りは, *Ma-zu, te-o-jo do-e-ra* のように, 一音節を表わす一文字ごとに *-* で区切って転写するのが慣例であるが, 印刷の簡便のため, 本稿では *-* を廃して, 続け書きする。
- 9) Lycia 語碑文に見える人名などを引用するには, Kalinka, *Tituli Lyciae, lingua Lycia conscripti*, Wien 1901 (略 TL) の番号・行数による。なお *Mizu* には Gr. 語の対音として *Μεσος* (32. d, s) が添えられているから, *Mizu* の方は男子の名であろう。
- 10) 以下, Boğazköy 文書の名前は, Emm. Laroche, *Recueil d'onomastique hittite*, Paris 1952 によって引用し, ^{SAL} *Māku* (Rec. no. 371) ^{SAL} *Nāru* (no. 468) のように, この著に登録された番号を添えることにする。^{SAL} は, 女子の職名や人名の前に附される決定詞である。
- 11) hieroglyphica hethitica の略。象形文字の Heth. 語は, 近來はむしろ Luv. 語の方に関連が深いことが認められ, Bild-Luwisch (略して BL. と書かれる) のように呼ばれることも多い。
- 12) 例えば, luv. *ura-* ‘大きい’ について Joh. Friedrich も fremdartig といっている; Friedrich, *MNHMHΣ XAPIN I*, Wien 1956, p. 112.
- 13) Lyc. 語の原型は, すなわち Luv. 語であるかも知れない。つまり e) と b) とは同一物として相重になってしまう可能性がある。
- 14) 例えば, Lin. B の *za* の字 ♀ は, ‘命, 生きる’ などを意味する Egypt 象形文字の *ānx* ♀ にほとんどそのままである。
- 15) C. D. Ktistopoulos, *Études mycéniennes*, Paris 1956, p. 189; P. Meriggi, *ibid.*, p. 193.
- 16) Meriggi, loc. cit.
- 17) A. Furumark apud Palmer, op. cit., p. 237. なお, abl. を表わす語尾 *-da* があるとい

- うが (Palmer, l. c.), abl. の語尾は, luv. *-ati*, lyc. *-edi* で, Lin. A の *-da* と一致しない, ただし, hh. では, abl. *-ta* である; cf. Laroche, *Dict. de la l. louvite*, Paris 1959, p. 137; Friedrich, *Heth. Elementarbuch I*, Heidelberg 1960, p. 188; Kronasser, *Vergleichende Laut- u. Formenlehre des Heth.*, Heidelberg 1956, p. 103.
- 18) Osw. Szemerényi, MNHMHΣ XAPIN I, pp. 168—9; cf. quoque supra *Mazu, Maku, Naru, Idu*, etc.
- 19) Laroche, *Dict. de la l. louv.*, p. 138.
- 20) Szemerényi, loc. cit.
- 21) cf. 岸本, 西洋古典学研究 XI, p. 66; Heubeck, *Lydiaka*, Erlangen 1959, p. 44; M. Lejeune, *Mémoires de philologie mycénienne*, Paris 1958, p. 115.
- 22) cf. Schachermeyr, op. cit., p. 37; lyc. *pije-* の用例は, *pije-tē* (TL 36.6), *pija-tu* (57.5), *pija-ka* (149.17), etc.
- 23) luv. *piya-ma-* の *-ma-* は, participium passivum をつくる suff. である; cf., e. gr., Laroche, *Dict.*, pp. 139, 142.
- 24) Schachermeyr, l. c.
- 25) Friedrich, *Heth. Wörterbuch*, Heidelberg 1952, s. v. *pai-*, *piya-*, *piyanai-*.
- 26) Lejeune, op. cit., p. 174.
- 27) *ibid.*, p. 246.
- 28) H. Pedersen, *Lyk. u. Hitt.*, Kopenhagen 1949, p. 14.
- 29) しかしながら我々は, いまだこれらの名が, Doqo-so, -no, -ro のように構成せられたものか, それとも Do-qoso, -qono, -qoro として構成せられたか, あるいはこれらが語源の上では全く関わり合う所のない三の別の名であるかさえ, 実はよく知らないのである。
- 30) cf. B 876, Herodotus I 173; Lejeune, op. cit., pp. 55, 64, 258.
- 31) Laroche, *Dict.*, s. v. 周知のように, 印欧語で '眼' を表わす語は, **okw-* (> skr. *ak-ṣi*, gr. ὄσ-σες, ὄφ-θαλμός, lat. *oc-ulus*, aksl. *ok-o*, lit. *ak-is*) であった。
- 32) cf. 伊谷純一郎, ゴリラとピグミーの森, (岩波新書) 1961, pp. 205, 109. 強いて類例を求めれば, 印欧語の範囲にも, gr. *ἀράκων* '見者' のような名がある。
- 33) Lejeune, op. cit., p. 274.
- 34) Schachermeyr, *Die ältesten Kulturen Griechenlands*, Stuttgart 1955, p. 241.
- 35) cf. tamen Alb. Carnoy, *Dict. étymologique du proto-i.-eur.*, Louvain 1955, s. v. *Μυκίμη*.
- 36) v. supra p. 102.
- 37) Palmer, op. cit., p. 154.

Anatolia の人名と Aegaeum の人名

- 38) cf. Laroche, *Rec.* no. 1223; I. J. Gelb, *Hittite Hieroglyphic Monuments*, Chicago 1939, 3.3.
- 39) v. supra p. 105.
- 40) cf. Kishimoto, *Kôbe Gaidai Ronsô IX* 3, 1959, p. 123 et sqq.
- 41) 岸本, 西南アジア研究 No. 9, pp. 14—17.
- 42) Friedrich, *Heth. Wb.*, s. v. *sai-*, *siya-*, *siyanta-*.
- 43) Ktistopoulos, op. cit., p. 191.
- 44) Schachermeyr は, これらの suff. を地中海言語の残した遺物 *reliqua* と見る, v. *Luwier auf Kreta?* p. 32 et sq.; *Die ältesten Kulturen*, p. 242 et sq.
- 45) cf. 岸本, 西南アジア研究 No. 9, p. 32 n. 56; Palmer はしかし, *-assas* < *-asyas* < i.-eur. **-osyo-s* として, gen. sg. の **-osyo* (>gr. *-oio*, skr. *-asya*, arm. *-oy*) の格形が語幹として扱かれて, さらに格語尾をとるに至り, かくしてこの種の所有形容詞が成立したと説明する; Palmer, op. cit., p. 242.
- 46) cf. Kishimoto, op. cit., sub n. 40) supra.
- 47) cf. Laroche, *RHA XIX* 69, 1961, p. 78 s. v. *dankuwa*.
- 48) このほか, さらに α) 女性人名の suff. lyc. *-eti*, (*-arıs*), heth. *-ati*: myc. *-ati*; β) abl. の語尾 lyc. *-edi*, luv. *-ati* の二例を挙げることができるが, 詳細は別の機会を待たねばならない。
- 49) ただし Lyc. 人自身も '海の民' の一部に加わって, この動乱に一役を演じたいことか, 13世紀末の Merneptah 王の Carnak の碑文に *Serden*, *Sekelesa*, *Akaiwasa*, *Turusa* と並んで *Luku* の名があることから知られる。
- 50) cf. Laroche, *Rec.*, p. 78.
- 51) cf. *ibid.*, p. 124 et sqq.